

間違い探し

学術論文などを投稿された経験がある方は身に覚えがあるかと思いますが、査読によって記述の間違いを指摘されることは口惜しいことです。ただ、どんなに注意していても、“岡目八目”で他人は気が付くのに自分の力だけではなかなか間違いをゼロにできません。

一方、他人の間違いにはよく気が付くものでお節介と思われることを恐れながらついつい指摘したくなるものです。

街を歩くと横文字が目につきますが、職業的な習性で、おかしな英語に気が付くことがよくあります。あるとき、行きつけのスーパーマーケットで以下のような英語

We and XXX(スーパーの名前) are offering a fresh **vegetable** and **adelicious** fruit cheaply for **every day** customer.

のプラカードを目にしました。誰のための英語なのかは判然としませんが、明らかにおかしいので、よせばいいのに、

We **at** XXX(スーパーの名前) are offering a fresh **vegetable** and **a delicious** fruit cheaply for **everyday** customer.

(私たち XXX は、**毎日**のお客様に新鮮な**野菜**や**おいしい**果物を安価にご提供しております)

とすべきでは、とスーパーの本店に手紙を出しました。暫らく返事はありませんでしたが、ある時、くだんのスーパーに行きましたところ、

We and XXX(スーパーの名前) are offering a fresh **vegetable** and **a delicious** fruit cheaply for **every day** customer.

となっており、everyday (毎日の、形容詞)ではなく、依然として **every day** (毎日、副詞)のままになっています。うるさい外国人がいたら何か言われそうな気がします。

スーパーでの件では、家内は「お節介ね」といってあまり快く思っていないようでした。

ことほど左様に最近はやたらと五月蠅うるさくなった、というのが家内の思いのようです。人を不快にさせる御節介は控えようと思いますが、“間違い探し”の癖は改まりそうにありません。

実は、かく言う筆者にも同じ間違いをした経験があります。随分以前に Facebook に孫と一緒に写真のキャプションに、うっかり、with **grand children** としたところ、英語のご堪能

な著名な先生から、「安原さん、with **grandchildren** ですよ」と指摘されました。日ごろ、学生さんを中心に若い人たちには、「できるだけ、細目こまめに辞書を引くように」と言っているくせに、だれが見ているのかわからない Facebook で十分な確認を怠って一語と二語の区別を間違えるのは恥ずかしいことです。“やたらに、外国語を使用しない、使用するときは、細心の注意を払うこと”は、いくつになっても教訓にしておかなければなりません。

間違いを 孫まごと競まをいて 探しおり

ゆるゆるのとき 忽たちまちにして

代表理事 安原一哉
(令和4年6月1日)